

令和7年度 奈良市立東登美ヶ丘こども園 研究実践概要

園長名 織田 由起子

全園児数 72名

1. 研究主題 遊びを通して育むしなやかな心と体 ～存分に体を動かす経験を通して～
2. 研究年度 初年度
3. 研究主題設定理由

全身を使った粗大な運動遊びは、存分に体を動かして満足感を得ることで、身体の発達と気持ちの安定や切り替えにつながり、自己肯定感や意欲の芽生えを育むものだと考えた。そこで、子ども一人一人の姿を丁寧に捉え、存分に体を動かす経験を積み重ねながら『しなやかな心と体』を育むために、意図的な環境や援助のあり方を探り、取り組みたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

存分に体を動かして遊ぶことが子どもの心身の発達にどのようにつながるのか、『しなやかな心と体』がどのように育まれるのかを捉えながら、安心して繰り返し挑戦できる環境設定や保育者の援助の在り方を探る。

②研究の重点

- ・子どもが主体的に体を動かしたくなるような環境をどのように整えるかを学年の枠を越えて連携しながら検討し、用具や空間の配置、遊びのきっかけとなる仕掛けなど、意欲を引き出す身体的な遊びや環境を構成する。
- ・子どもが安心感、満足感をもち、繰り返し挑戦しようとする気持ちを育むための援助や関わりのあり方を明らかにする。

③活動の方法

毎月カリキュラム会議を行い、遊びの様子や課題を共有し、環境設定や援助のあり方について互いに助言し合いながら検討する。

保育者の意図と援助・環境構成

しなやかな心と体の育ちが見える子どもの姿

<やってみよう> 3歳児 7月

4月からみんなでダンスをしたり、ダンスコーナーで衣装を着けて踊ったりして保育者も一緒に全力で体を大きく動かして楽しく踊っていた。また5歳児が保育室や中庭に来てダンスショーを披露してくれると、子どもたちはお客さんになって見ることを楽しんでいた。毎日5歳児が誘いに来て見ているうちに、知っている曲が流れてくるとステージのそばに集まっていき、5歳児と一緒に踊る子どもが増えてきた。5歳児の動きを真似しながら元気にジャンプをしたり、くるくると回って踊ったり、体を大きく動かすことを楽しんでいた。その後は、5歳児がいなくても「〇〇を踊りたい」と5歳児が踊っていた曲をリクエストし、ポンポンを持って振り付けを思い出しながら繰り返し踊っていた。また、自分の好きな曲が始まると「一緒に踊ろう」と友達を誘って遊ぶ姿が増え、スカートや花冠などの衣装、ポンポン、マイクなど好きなものを選び、踊ることをより楽しむようになった。



<考察>

保育者が全力で一緒に楽しく踊る姿や、職員間で連携を取り5歳児のダンスに触れる環境を設けたことが、子どもたちの繰り返しやってみようという気持ちにつながった。また、ダンスコーナーのステージと客席の間を区切り十分にスペースをつくることで、踊る楽しさや見てもらう嬉しさを感じられるようになった。そして、自分の好きなものを選び、いつでも楽しめるように様々な衣装や道具を継続的に用意したことが、いきいきと体を動かして遊ぶ姿につながったと考えられる。

<サーキット遊び> 3歳児 11月



1学期から中庭や保育室で親しんでいたクネクネ道、飛び石、平均台、ゲームボックスなどを使って園庭でサーキット遊びを始めた。慣れた用具だったこともあり、すぐに喜んで遊び始めた。毎日存分に体を動かす経験を楽しみながら積み重ねて欲しいと思い、同じ用具でも配置を変えたり、はしごを高い方から低い方に渡ったり、クネクネ道や平均台に小さなボールを置いてまたぐようにしたりするなど工夫を加え、ちょっと難しいけれど挑戦してみたくなるような環境を用意した。すると、はしごは進む先が見えないので、足の間からのぞき込んで足を置く場所を確認して慎重に渡っていた。また、今まであつという間に渡っていたクネクネ道や平均台は、置いたボールを踏まないようにバランスをとりまたぎながらゆっくり進んでいた。保育者が手を添えたり見守ったりする中で、少し難しくなったコースに何度も挑戦した。できた時には保育者と目を合わせ嬉しそうに微笑んだり「見ててね」と得意そうにやって見せたりした。保育者に「すごいね」「かっこいいね」と声をかけられたことが自信となり「一緒にしよう」と友達を誘い繰り返し遊ぶ姿が見られた。



慣れ親しんだ用具を園庭に広げたことで、子どもたちは安心して遊び、のびのびと体を動かす姿が見られた。また、用具の配置を変えたり、少し難しさのある仕掛けを加えたりしたことで、「やってみたい」「おもしろそう」という気持ちが自然と引き出されたと思われる。そして、保育者の見守りと援助の中で安心して遊び、挑戦する姿を励まされたり認められたりしたことで繰り返し遊ぶことを楽しむ姿につながったと考えられる。

<考察>

<サーキット遊び> 4歳児 11月

普段、砂遊びや転がし遊びが好きなA児は、体を動かして遊ぶことが少なく、5歳児がつくった難しいサーキット遊びをしている友達の様子を見ている姿があった。保育者はA児にも体を動かして遊ぶ楽しさを感じてほしいと思い「サーキットやってみる？」と声を掛けた。すると「一人でできるかわからない」と答えた。「先生と一緒にやってみる？手を繋いだらこわくない？」と聞くと、保育者が横にいることを確かめながらサーキットを始めた。しかし、高い巧技台からジャンプすることに不安な様子で足を止めた。すぐに声を掛けずにそばで見守っているとA児は「ちょっと怖いかな」と保育者に伝えた。「どうする？」と問いかけると、しばらく考えて「手を繋いでほしい」と言った。保育者がA児の手を繋ぐと、ゆっくり動き出し巧技台からジャンプができた。その後、もう一度保育者と一緒にコースをまわると、3周目からは一人で挑戦し始めた。途中、A児が少しためらっていると、後ろで見ていたB児が「がんばれ」「大丈夫？」「怖い時は先生に手を持ってもらったらいいよ」とA児に声を掛けた。その後も「見ててね」と保育者を呼んで繰り返し挑戦し、友達と一緒に何度もコースをまわる姿が見られた。翌日、コースの形が変わっても何度もサーキットに挑戦し楽しむ姿があった。



<考察>

・A児の挑戦してみたい気持ちと不安な気持ちを受け止め、安心できる保育者がそばで見守り、励ましたり援助したりすることで、繰り返し挑戦する姿につながった。成功できたことが自信と満足感につながり、少し難しいことにも繰り返し挑戦しようとする意欲や、体の育ちにつながった。また、保育者の子どもに寄り添う姿を周りの子どもが見ることで、同じように友達の気持ちに寄り添おうとする『しなやかな心』につながったと考えられる。

<ずっと鬼だったから> 4歳児 1月

高鬼や氷鬼を友達と誘い合って楽しむ中で、自分の思い通りに遊び、バリアをしたり鬼になったら遊びを止めたりする姿があった。ルールを共有して遊ぶことが難しかった為、その都度遊びを見直せるよう声を掛けてきた。



園庭で氷鬼をしていたA児が突然泣き出し、一緒に遊んでいたB児が心配して保育者を呼びにきた。「A君が泣いているの。何でかわからない」と困りながら伝えた。保育者が行くと、周りの友達は「こけたの？」「痛かったの？」とA児の泣いている理由を考えながら聞いていた。A児は、その質問に首を横に振って答えていた。保育者は「みんな心配しているよ」とA児に周りの友達の気持ちを伝えた。C児が「疲れた

の？」と聞くと、A児はうなずき「ずっと鬼だったから」と答えた。保育者が「そうか、氷鬼はタッチしてもずっと鬼だもんね」と伝えると、D児が「僕が代わるよ」と声を掛け鬼を代わった。「A君、代わってもらえて嬉しいね。D君優しいね」と声を掛けると、A児はD児に「ありがとう」と伝えた。保育者は「交代したくなったらどうしたらいいかな？」と、周りの子ども達に問いかけた。すると「交代してって言ったらいいい」「時間で決めようよ」と、自分の考えを伝えながらルールを決めて遊び始めた。



<考察>

- ・保育者が、子どもの気持ちに寄り添い、一人一人の思いや言葉を引き出し、友達の思いに気づけるように言葉掛けをしたことで、友達の気持ちに寄り添い、解決策を考えようとする姿につながった。
- ・子ども達が自分たちに合った遊び方を考え、共有できるようにしたことで、遊びの楽しさが増し、遊びの継続や意欲的に体を動かす姿につながったと考える。

<タイヤの上で止まってみよう> 5歳児 11月

10月後半頃から園庭で『だるまさんがころんだ』を毎日楽しんでいて、サーキットコースや転がし遊びで園庭を広く使っていた為、『だるまさんがころんだ』で逃げる距離が短くなり、すぐに鬼が交代になったが、その展開の早さを楽しんでいた。保育者は、もっと体全体を使った遊びとして継続できればと考え、サーキット遊びで使い親しみのあるタイヤを並べてその上を通る『だるまさんがころんだ』を遊びの展開として提案した。A児は「それ



いい考えやなあ」「面白いと思う！」と、友達を誘ってタイヤを取りに行き、相談しながらタイヤを並べ、積んだり板を渡して橋をつくったりして配置を考えた。再び『だるまさんがころんだ』が始まると、A児は、早速タイヤの上を渡り始めた。鬼の「だるまさんがころんだ」の合図で、タイヤの上で止まろうとしたが、不安定な足場から足がふらついて体が動いてしまい、すぐに鬼に名前を呼ばれてしまった。A児は「タイヤの上はグラグラするから止まるのが難しい」と言ったが、次の回もタイヤの上で踏ん張りながら渡ったり止まったりした。保育者は「Aくん、タイヤの上で止まっているよ！すごい！グラグラしないの？」と頑張りを認めながら、周りの子ども達に知らせた。それを聞き、タイヤを避けて通っていた子ども達も、A児の姿を見てタイヤの上を通ることに挑戦するようになり、慣れてくると、鬼の合図に合わせてタイヤの上でバランスを取り、ポーズを決めたり片足で立ったりして、難しいルートを選んで挑戦することを楽しむようになっていった。

<考察>

- ・足元が不安定なタイヤの上で“止まる”ことは、子どもにとって難しいことであったが、その難しさを繰り返し楽しむ中でバランスを取り、体の使い方を身につけていった。
- ・保育者が挑戦する姿や頑張りを認め、言葉にして伝えたことで、うまくいなくても何度も挑戦しようとする姿へとつながっていった。
- ・挑戦している友達の姿を見て「やってみたい」と感じる気持ちや、同じ遊びを共有する楽しさは、保育者が子どもの興味や挑戦を受け止めながら環境を整え、安心して取り組めるよう援助したことで高まっていった。その中で、子どもたちは失敗や難しさを友達との関わりを通して前向きに捉え、意欲的に遊ぶようになり『しなやかな心』の育ちへとつながったと考えられる。

<落ちたらクモに食べられます> 5歳児 12月

毎日「昨日よりも最強のコースをつくろう」とクラス全員で分担して、巧技台をどのくらい高くしようかと相談したり、はしごや平均台に傾斜をつけたりして確認し、試しながらサーキットのコースをつくっていた。

その中でA児は、エス棒をたくさん運んで友達と並べていた。A児は「こうしたら面白いんじゃない？」と言いながらどんどん並べて形をつくっていき、周りの友達も「うん、それいいね」と言いながら一緒に並べた。完成すると、A児は保育者を呼びに来て「先生見て！クモの巣みたいにしたよ！」「落ちたらクモに食べられます」と嬉しそうに伝えた。保育者は「クモの巣のコース、面白いね。渡るのが難しそう」とA児の発想を認め、エス棒の上を歩いている子どもに「虫さんたち、落ちないように！落ちたらクモが来るんだって！」とイメージの共有ができるように声を掛けた。A児も嬉しそうに自分も渡ってみたい、友達に「クモの巣コースで一す」と伝えたりしていた。



数日後、「クモの巣コースにクモをかいて貼りたい」という思いから、A児は絵の具で画用紙にクモの絵をかき、クモの巣コースに貼った。「クモを踏まないように、またいでね」

とA児が説明すると、同じクラスの友達は「わぁ、クモがいる！」と面白がって渡り、A児はその様子を嬉しそうに見ていた。3歳児の子どもがやって来て「え…クモ？ちょっとこわい」と躊躇していたので、保育者が「みかん組さんには難しいかもしれないね」とつぶやくと、A児は「みかん組さんは、クモのところを通らなくてもいいよ」「落ちてても食べられませんが、大丈夫」と優しく声を掛け、3歳児が渡る様子を優しく見守った。

<考察>

- ・一学期から楽しんでいたサーキットづくりを通して、巧技台や平均台、タイヤ、エス棒等それぞれの特性や面白さがわかってきている。高さや傾斜を工夫し挑戦する中で、子どもたちは体の動きを調節し、少しずつ自分の体の使い方を身につけていった。
- ・A児は、エス棒をクモの巣に見立てて配置し、そのイメージを友達と共有することで遊びを広げていった。自分の発想が受け入れられ、遊びとして成立する経験は、意欲や自己肯定感を高め、友達と相談しながら遊びをつくる力を育てていると考えられる。
- ・保育者が不安を感じている3歳児の姿をつぶやいて知らせたことで、A児は3歳児が安心してコースを渡れるように考え、声を掛ける姿につながった。その姿から、相手の気持ちを受け止め、寄り添って関わろうとする『しなやかな心』の育ちがうかがえる。保育者が子どもの発想を認め、遊びの世界観を共有しながら見守ったことで、遊びが継続・発展し、心と体の両面の育ちが支えられたと考えられる。

5. 研究の成果

- ・3歳児は、保育者が一緒に楽しむ姿や、意図的に用意した環境の中で自分なりのペースで繰り返し体を動かすことを通して「楽しかった、またやってみよう」という気持ちが育ち、今後の遊びへの意欲につながっていった。また、5歳児の生き生きと体を動かし遊んでいる姿に自分たちもやってみようという憧れや、友達と繰り返し同じ曲や動きを楽しむことで友達との関わりを広げたりしていた。そのことが、3歳児なりの楽しさを共有する姿につながり保育者の見守りの中で安心して繰り返しやってみようとする思いが育まれた。
- ・4歳児は、保育者が子どもの発達や心情を理解し、寄り添いながら一人一人に応じた援助や言葉掛けをしたことで、「やってみよう」と一歩踏み出す姿が増えていった。安心感の中で、挑戦する経験を重ねることで、体を動かして遊ぶ心地よさを感じることができた。また、保育者が仲立ちしながら遊ぶことで、友達の思いに気付き、寄り添おうとする姿が育まれ、友達同士の関わりがより豊かになり、友達と一緒に遊びを継続する楽しさを感じられるようになった。こうした経験が『しなやかな心と体』の育ちにつながってきている。
- ・5歳児は、1年を通して体を存分に動かす遊びを継続していく中で、自分たちで遊びを構成し、友達と相談しながら発展させていく姿が多く見られた。身近な用具の特性を知り高さや配置を工夫する過程では、自身の体の感覚に気付き、状況に応じて動きをコントロールする『しなやかな体』が育まれてきたと思われる。また、友達の発想や挑戦を受け止めながら、子ども同士が遊びを共有・展開する中で、相手の様子に合わせて遊びの方法を変えようとする姿が見られた。うまくいかないことを前向きに受け止めたり、柔軟に対応したりする『しなやかな心』の育ちがうかがえた。その過程において、保育者が一人一人の発想や挑戦を認め、言葉にして周囲の子どもに知らせたり、遊びのイメージを共有できるよう働きかけたりすることが、友達同士が互いの思いや考えを受け止めながら自ら遊びを広げていくことにつながった。保育者が、子どもの思いを尊重し発想や試みを認めながら意図的に環境を整えたことで、子どもの主体性が引き出され、心と体が結びついた柔軟な育ちが促されることがわかった。

6. 今後の課題

子どもが自ら遊びをつくり、体を存分に動かしながら挑戦を続けられるよう、今後も日々の保育の振り返りやカリキュラム会議の中で、具体的な遊びや環境構成の在り方を互いに助言し合いながら共有していきたい。また、用具の選び方や配置、難しさの段階を学年間で話し合いつなげていくことで、子どもの育ちが連続していくよう工夫していきたい。

子どもの試みや気付きを丁寧に受け止め、必要に応じて支える保育者の援助について、職員間で振り返りを重ねていく必要がある。異年齢の関わりを意識した“遊びの場づくり”を進め、発達に応じて育ちを支える環境を整えることで、園全体として『しなやかな心と体』の育ちをさらに深めていけるよう努めたい。